



また戦争っすかあ？

チュートウ・イズ・オールウェイズ・ビジー 中東はいつでもいそがしい。

当社消息筋は語る。

第5巻第5号
通巻第53号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

どうでもいいような日常の中にも、ふと目を留めなくなったり、耳を引かれたりする場面が存在する。たとえば、朝、新聞を取ると玄関を開けたところ、後ろからちりちりと鈴を鳴らしながら、我が家のでぶ猫がやってきて、外に飛び出し、我が家の扉を叩く。五月の日光を浴びた黄色い花が何本か、風に揺られ、辺りをモンシロチョウが飛び交う。その姿に飛びつこうとするはか猫。その爪の先を僅かに掠め、飛び去る蝶。太つちよは何もなかつたように、また伸びをして、草叢に寝転がり、欠伸。遠くに、聞き覚えのない、鳥の囀りが聞こえる。

完全に同一の光景ではないけれど、よくある日常の一幕である。さりながら、何となく心を魅かれ、その光を、音を、どうにか切り取ってどこかにしまっておきたい、そんな気のある一瞬。単純な話、カメラを持ち出したり、マイクとレコーディング機材を担いだりすれば、そんなことは雑作もないことではある。デジタル・ヴィデオにその光景を収め、コンピュータで編集することさえ可能なのだ。なかなか素晴らしい出来栄に思えるので、誰か友だちにも見せたいなあと思えば、DVDに保存して配付することすらできてしまう。コンピュータ周辺の技術は、この不景気な世の中にあっても、なかなかの速度で進歩を続けている。

今日の紙面から

- 二面 オーラ面
松本と話そう!ピンポン
- 三画 芸術面
レイズ・ギャラリ
- 四画 からすライブラリー
CD 『ステイキング&ザボリス・シンケルス本』、『山行水行』、『ノー・マンズ・ランド』
- 五画 国際面
ロンドンレポート・フォトギャラリー
- 六画 建築面
ウォーターネットワーク第2回

の写真しかないし、その後登場するカラー写真も、今となっては随分あやふやな色合いでしか残存していない。それに比べて、現代の技術の進歩たるや恐ろしいほどのものだと言える。しかしながら、それでも、まだまだ十全からは程遠いのも事実である。収められた映像は平面でしかないし、カメラが焦点を合わせたところ以外では、それなりにぼけたものでしかない。相当に鮮やかだと思っていた発色も、実物と比べてみるとそれほどのもでもなかつたりする。風が葉を揺らすさわめきは録音されているものの、空気の流れを肌で感じることもなく、到底ではしない。湿度の高い五月の草叢の喧嘩するような匂いは、端から無視されている。その程度のものなのである。もっとも、遠くはない未来に、匂いや感触も何もかも、全てを取り込んで再現するシステムが出現しないとは限らないのだが。

ここ暫く、頻々と府中に足を運んだ。何のことではない、家族に入院する者が出たので、付き添いのような見舞のような奴隷のような病院通いである。我が家から二〇キロほど下っただけだけれど、建物の周囲は森に囲まれているような具合。六階の窓から眺めると、天気次第では新宿が見えたり見えなかったり、微妙な遠さ、近さ。季節柄、雨に降られることも何度があった。ちよぶと

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そうペンペン

五月の連休は実家の熊本に久々に帰りました。

気付いたこと。内海って、外海とは別ものだなあ、ってこと。熊本は有明海に面しており、その海岸線を車で走りまわりました。とても静かでやさしい。車から降り、浜に身を置くとささやきかけるように波は出迎えてくれる。今いる鵠沼海岸が元気に話しかけてくるのとはまるで違う。それに慣れてしまった自分にとっては、実はこっちの方が古いのに凄く新鮮であった。そして、この海が、海苔の産地であるわけもよく分かった。

海に向こうには必ず陸地が見える。ちなみにそれは天草諸島であり、さらに向こうは長崎である。ただ落ち着く。行く先は必ずあるのである。湘南の海のように地平線が続き、地球は丸いというのを教えてくれることはしない。その向こうに何があるのか、ハラハラドキドキなんて決してさせない。まさしくダウナー系の海なのである。ザザンなんて絶対、熊本からは生まれなかっただろう。

そうこうしていると父親が「松本家の墓」を見に行こう、よう分からんが近場の隣町に実はあるんだ、ってなことを言ってきた。「近所のお寺の中にあるやろ?」と言ったら、「いや、別にあってそれが昔ながらのやつらしい。」と。いろいろ話を聞いてるとどうやらこういことらしい。父親の父親である人当然、自分にとっての祖父さん。死んでしまっていて見たことはない。(人は実は再婚していて、二度目の奥さん(この人

が自分にとっての生物学的祖母さん。)とその姑とはうまく行ってなかったらしく、一悶着あったらしい。それでその生物学的ばあさんとその一派は「松本家」の墓に入るのを拒み、別個に近所のお寺の中に祭壇を作り、そこに入ったのだと。そして昔ながらの松本家の墓は放り出されたのだと。もちろん、お墓の分断であり、本家本元のものを見捨てられた状態であった。

迷いつつもまるでTVの冒険番組みたく、田舎の海岸の細道をくねくねと行きました。そして有明海を西に望むみかん畑の上にとぼつりと、しかし数本の木がこんもり茂った一種異様なオーラのなかに有りました。しかしよく見ないと墓地とは分からない。敷地内は雑草が生え放題。マムシが出るかもぞ、つという事で棒を拾い臨戦体制。が、しかし入り口が見当たらず。そう、ひどいことに長らく人の出入りがなかったためか、その道さえ風化していたのです。まるで吹きだまり。なんとか入った。そしてある程度、雑草を処理し、やっと墓石が確認できるようになった。しかし、ずれていたりの、刻字が消滅しかかっていたりの、ほんとに哀れな状況。カウントしてみると十七基だ。そして、父親が用意していた、家系図を元にしたメモを頼りにそれぞれの確認作業に入った。しかし、古い。天保だの何だの、学生時代に世界史選択の自分にとってはほとんど理由分からぬ時代

のものが普通にある。そんななか、一番近いところで祖父さんの墓石があった。それはさすがに他のものよりもちゃんと墓石然然して確認しやすかった。が、と、いうことはです。彼は自らそれを用意してといてそれに入れてもらえていなかった、ってなことになる。可哀想に、祖父さん。だって、さつき述べた近所のお寺に分離して祀られていたのだから。つまり、二度目の奥さんがまさに骨肉の争い

の結果、そうしたことになる。たまに、うちの父親は真夜中になさされるらしい。そのときその祖父さんが無言で枕元に佇んでいることがあるという。こういことだったのだ。ちなみに自分が最初に手を置き、確認した墓石は「松本東太郎の妻」ということだった。

実はこの東太郎。とんでもなく女癖が悪かったらしく、妾(めかけ)を作りその人を不幸な死に方をさせたような、ひ祖父さん。それならまだしも、前に数回、霊能力がある人に「あなたの守護霊」といわれたことがある人。オレは何度「頼むから、守らなくてもいいから離れてくれ。」と訴えたことか。女連の悪さはこのせいなのか、と思ったりさえした。そんで、その東太郎の妻にこうやって巡り会うとは、墓石を撫でました。さぞかし大変だったの

でしょう、と語りかけました。ゆっくりと休んで下さい、と慰めました。あなたのDNAはいまここにちゃんと居りますよ。自分の中で生きてますよ。必ず幸せにしてみせますよ。そして、今までここでの存在に無頓着ですいませんでした。これから、熊本に帰るたびにお話しますよ、と。もちろん、他の墓石にも同じような気持ちで手を合わせました。

帰り、丘の上から見る有明海はいつものように、静かで、やさしかった。

そのあと何日も経たないうちに「藤沢の鵠沼海岸に戻って来ました。その道の途中、「宜保愛子、ガンのため死去」という雑誌の記事が目に入りました。

「宜保さんがよく言っていた、お墓参り。してきました。そして、宜保さん。ゆっくり休んで下さい。」

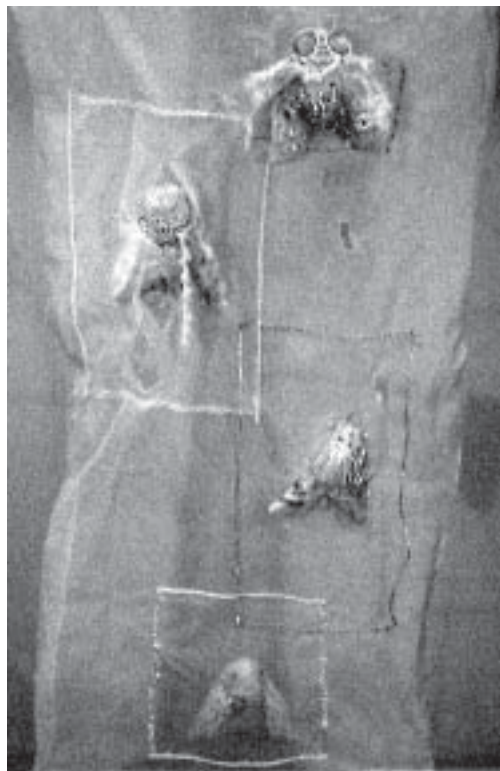
痴漢・通り魔撃退いたします

ストーカー
パスター

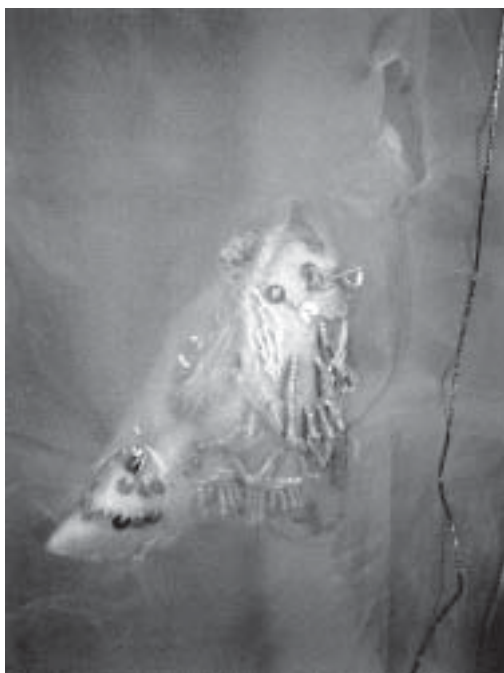
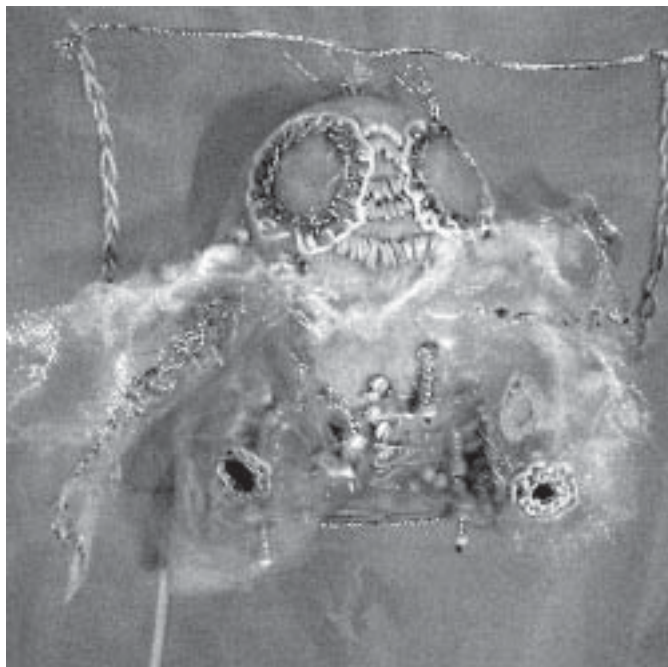
produced by
P.D.Agency

tora@pda.co.jp
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
Los Angeles: CA 90028, USA
voice : +1-310-493-1001
facsimile : +1-323-466-5645

Rei's Gallery



トウメイな時間



ちよつと早いですが、今回作品のモチーフにしたのはセミの羽化です。シルクオーガンという、透明な素材に出会いすっかり魅せられてしまいました。

そこから連想されたのが、抜け殻の透明感や、幼虫の羽。

また、羽化って言葉も不思議な響きで、実に神秘的。

シルクの素材も蚕から出来ているだけあって、生命の吐息が感じられる。

まだ今は、幼虫は土の中だけど、あと一ヶ月ちよつと待てば家の玄関の扉に蝉の抜け殻がくっついてるのが、また見られるでしょう。

STING & THE POLICE SINGLES

CD SINGLE POCM-1240 JP



ポリスやスティングの曲は数多くカバーされている。イングリッシュマン・イン・ニューヨークのジャマイカ版などは有名。そんなオリジナルと違うテイストで最近特にはまっているのがこのCDだ。ポリスの名曲のうちの一曲、ロクサーヌのリミックス版、ROXANNE'97。とにかくかっちイイの一言。メインのメロディはスティングの歌うオリジナルに近いロクサーヌに、パフ・ダディがラップを被せたのだ。何故か絶妙のバランスに仕上がっており、前のめりで疲れるラップとは違い、何度リピートしても心地よくそれでいてノリは抜群。自分は日本版しか持っていないが、2曲目以降はウォーキング・オン・ザ・ムーンばかりだが、米国版にはロクサーヌが3バージョン収録されているので是非手に入れたい所だ。(小張寅蔵)



山行水行

リチャード・ロング

淡交社 1996年

ISBN4-473-01457-6



Books

自然の中に人の跡を遺す。

石を一つ置く、それが単なる石ころだったとしても、それまで意味を持たずにあったその場は突如として意味を持ちはじめ、置かれた石ころと置かれた場との関係が見出され、それまで自由だった場に緊張感が生まれる。たった一つの小さな行為がなされる結果は大きい。

日ごろ、まわりに対し無意識に生活していると、自らの行為が及ぼすものなど、雑多な空間の中にまみれて気づかないものだが、実際はそれなりにその場をつくっているのかもしれない、などと、この本をばらばらと観て思った。(と)



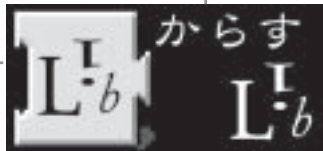
ノー・マンズ・ランド (No Man's Land)

監督：ダニス・タノヴィッチ

出演：ブランコ・ジュリッチ、レネ・ビトラヤツ、フィリップ・ショヴァゴ
ヴィッチ、カトリン・カートリッジ、ジェーン・リビングストン

2001年公開(フランス/イタリア/ベルギー/イギリス/スロヴェニア)

DVD：ポニー・キャニオン



Films



No Man's Land

新人監督でありながら、なのか、新人監督だからこそ、なのか、大胆なデビュー作である。美しい青空の下で、不条理な状況下で、兵士という衣装を纏った人間たちが右往左往する。「不条理な」などという使い古された言葉を使ってしまったが、考えてみれば、戦争とは、常に不条理なものなのだ。

ばかっている。笑わずにはいられない。だが、それだけではない何か伝わってくる、手足の作。アメリカの独裁者たちの目にはこの物語はどう映じるのだろうか。やはり、この笑いの向こう側にある何かに気づけないのだろうか。世界の平和はまだまだ遠い未来のことなのか。(全大)



362A 331A
London Report



ウォーターネットワーク 第2回

コンペティションと実際の工事は、ヨーロッパコミュニティのファンドによって、その20%をサポートされている。スペインだけでなく広くヨーロッパ中の関心が注がれる内容であった。テーマは、大都市そのものともいうことができる。

東京は世界に類をみない大都市だといい、今やSARSの脅威に晒されている上海も同じように大都市だというのが、そもそもアジアの都市と、ヨーロッパの都市は成り立ちが違う。都市という言葉の定義がヨーロッパからもたらされたものだとしたら、アジアには都市はないことになる。とても簡単に言えば、ヨーロッパの都市は、農村あるいは自然と対立するものとして、城壁に囲まれた場所であったということで、日本の都市は農村との間に境が無いということである。

言葉の定義や都市の成り立ちの経緯を越えて、人口が集中し、政治や経済の中心的な役割を担い、人間の活動が活発に行われている場所。緑や酸素などではない、様々なもの事の密度の高い、電気やガス、水などのエネルギーを専ら大量に消費する場所として、大きな都市は共通の問題を抱えている。大気汚染の問題、環境破壊の問題、ごみの問題、レジ袋の有料化なども随分と昔にスイスやドイツなどでは行われていた。

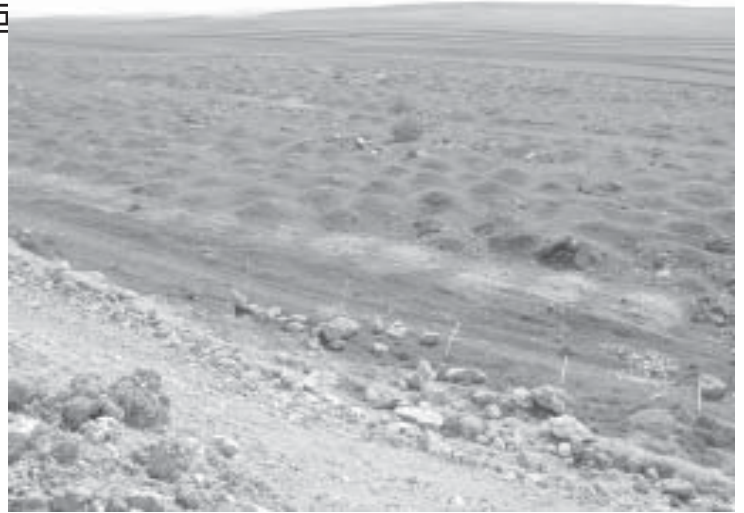
大都市には貧困層の居住地域の問題がついてまわる。ブラジルのファベラと同様の貧困層の住み処の問題がある。

ヴァイエッカ (Vallecas) にも、貧困層が土地を占拠して、ひとつのまとまった世界をつくっていた。写真に写る小さなこぶは、この地域一帯に、彼らの仮設の小屋が建ち並んでいたことを物語る。周辺では、薬の売買いが日常的に行われ、極端に治安の悪い場所であった。

日本の住宅・都市整備公団のような組織がスペインにもある。EMVという。マドリッドの周縁において、いくつかの大きな住宅



地の開発に取り組んでいる。そのひとつがヴァイエッカ (Vallecas) の開発である。5年前にやっとメトロが延伸され、今は環状高速道路が新たに建設中である。不毛の地に、あたらしい街をつくるのである。



それでコンペティションの目的であるが、この住宅地開発と合わせて、隣接する39ヘクタールもの大きな土地に、公園をつくらうというものである。39ヘクタールというと、上野公園や井の頭公園あるいは青山墓地などと同じくらいの大さになる。それも、単なる公園ではなく、エコロジカルでサステナブルな公園、都市の廃棄物を有効利用しようということが、コンペティションの、公園の骨格をなす。具体的には、下水処理場で3次処理された汚水をポンプで引戻し、自然の水の流れによる浄化作用をつかって、水のネットワークを形成し、ここで得られるきれいな水を灌漑用水として供給することで、緑豊かな場所を造りだそうというものである。それゆえに、ヨーロッパコミュニティのサポートも得られたのだろう。建築が社会の中で成立するなら、このような社会的な問題に、デザインを通してひとつの解を与えることが大切な仕事だろう。(つづく)

(篠崎健一)



ヤンヒポのご用と

お急ぎでない方は・・・

「完全犯罪は芸術である」何かの小説で読んだ事がある。以前官憲関係の知人から聞いた話だが、いわゆる迷宮入りになる犯罪の割合が多いのは通り魔的な犯罪だそう。被害者と犯人の関係を特定出来ないからとの事。昨今、ひつたりや強盗事件のニュースが非常に多い。日本の検挙率は下がり続けているのも憂慮すべき事実だ。そこで、完全犯罪について考察してみる。

完全犯罪を辞書で引いてみると、「犯罪であるという証拠を全く残さずに行われた犯罪」とある。という事はもし完全犯罪が成立していれば、犯罪自体が起こった事実が無いのだから事件にもならず当然官憲による捜査も行われていないのだ。だから世間でどのくらい完全犯罪が起きているのかは全く解らない。それでは、完全犯罪は本当に実現可能なのだろうか。

完全犯罪というと殺人事件を連想する。これは、巷にあふれる推理小説の題材としてはポピュラーである事に關係するだろう。しかし、言葉の定義からすると犯罪が起こったと露見しなければ、窃盗だろうが放火だろうが、詐欺や交通事故でも有りうる。人を騙して金品を巻き上げたとしても、騙されたと思わない限り完全犯罪として成り立っている事になる。多分その手の事は日常茶飯事起きているのではないだろうか。カルト系の宗教団体に土地家を搾取されても差し出した本人に騙された認識が無い場合は有る意味で完全犯罪という事になる。もちろん、搾取する側も騙している認識が本当になければ犯罪ですらないのだが・・・

では殺人事件に特定して考えてみる。殺人とは人類史上もつとも厳罰が科せられる犯罪だ。

(最終面に続く)

雷獣・害獣・病原獣

〜白鼻芯しらべ〜

SARS流行が明るみに出た当初より、その原因は動物をウイルスごと食べてしまったことにあると言われていた。四つ足といえばテール以外何でも喰うという中国人が口にしてしまったその動物とは何か。現状真つ先に名前が挙がっているのがハクビシンのようである。

ハクビシンを御存知だろうか？どうやらその四つ足動物は日本にも生息していて、果物を好物とするらしいが、残念ながら私はまだ実物を見たことがない。静岡県東部で小さな梨園を営む我が家近辺にも、まだ出没歴はない。しかし、近頃では全国的にその数を段々と増やしているという。カミナリの正体

地震、雷、火事、親爺。地震の次に怖いのは雷ということになっているが、雷の正体は何か？かつて江戸時代、それは獣に違いないと疑われたころがあった。落雷した木から逃げ出す獣の姿を見た猟師たちが言い出したものらしいが、語り継がれてきたその姿はこんな感じだ。

「身体の大きさは猫くらい。尻尾は長く、なにより目立つのは、頭から鼻先へ顔の真ん中に白い筋がある」

「雷獣」と言われたその獣の形容は、ハクビシンにそっくりである。ハクビシンは、頭から胴までの長さ五〇センチ、尻尾は四〇センチほどの胴長の体形をしており、日本に生息する唯一のジャコウネコ科の動物である。漢字では、「白鼻芯」。顔に一筋通った白い線に由来する名だが、かつてはハクモウテン（白毛貂）やタイワンタヌキ（台湾狸）などの俗称もあった。しかし分類上はネコとイタチの中間といったところで、イタチ科のテンとも、イヌ科のタヌキとも関係はない。

ジャコウネコ科の動物は、アフリカの東に浮かぶマダガスカル島と熱帯アジアを中心に広く分布している。ハクビシンに限っても、西はインドのカシミール地方、南はインドネシア、ベトナム、タ

イから中国大陸の各地そして日本と、その生息範囲は幅広い。

北限のジャコウネコ

江戸時代の雷獣伝承に語られた動物がハクビシンかどうかは、実のところはつきりしていない。というより、明治以降の近代生物学は、伝承を無視してしまっただけ。ハクビシンが日本で「公式」に発見されたのは、戦時中の昭和一八（一九四三）年、浜名湖の西に位置する静岡県浜名郡知波田村（現在の湖西市）でということになった。昭和一、二年ごろに、香川県の塩江町というところすでに捕獲されていたという未確認の報告もあるのだが、とにかく公式には前者の方ということになっている。

戦後、徐々に勢力範囲を伸ばしていったハクビシンたちは、一九六〇年代には静岡県のほか隣接する山梨、長野、あるいは四国の徳島、愛媛、はたまた東北の宮城でもその生息が確認される。当時は珍しい生き物として珍重され、昭和三一（一九五七）年には山梨県で県の天然記念物に指定されている。昭和五〇年には長野でも同じように天然記念物の待遇を得た。そして現在、ハクビシンの生息が確認された都道府県は二三におよんでおり、北は北海道でも捕獲されている。南方系の動物である彼らが北海道で確認されているのは驚くべきことで、北海道のハクビシンは世界中のジャコウネコ科の動物の中でもっとも北に住む者である。（左図）

一方で不思議な事実がある。熱帯系のハクビシンが、北海道にいて九州にはほとんどいないのである。これは日本におけるハクビシンが自然分布ではないことを示しているのではないか。つまり



彼らもともと日本にいたのではなく、人為的に持ち込まれたことを意味するというわけなのだ。...

渡来か土着か

日本のハクビシンには渡来説と土着説がある。渡来説をとる学者たちは、明治以降に毛皮用あるいはペットとして輸入されるまで、日本にハクビシンは存在しなかつたと主張する。確かにハクビシンが毛皮用に輸入され、養殖されていたことは事実である。戦前から戦中にかけてやはり毛皮用としてタヌキの養殖が行われていたが、その中にハクビシンが混じっていたらしい。タイワンタヌキとして連れてこられたのである。

しかし、敗戦後の食うや食わすの混乱期に毛皮どころではない。養殖業者の文字どおり「皮算用」は外れ、せっかく資金を投じて養殖したタヌキの毛皮には二束三文の値しかつかなかつた。結局商品化されることはなく、飼育されていたタヌキに混じって台湾からやってきた新参者たちも野に放り出された。こつて野生化したハクビシンがしだいに数を増やしていったというわけだ。

また、ハクビシンは戦前から動物園で飼育されており、それらの中には、戦争の混乱に紛れて逃げ出したものもあつただろう。あるいは、ペットとして東南アジア航路の船員に好んで飼われていたというから、そつていつルートで日本上陸を果たしたのもいかに違いない。

以上が外来ハクビシンが日本にやってきた経緯だが、しかし、だからと言って、それが日本にはもともとハクビシンがいなかったという説明にはならない。では渡来説を主張する人たちの根拠は何か。

たからだ。そこから逃げ出したものと確信する。また、ジャコウネコ類の化石が日本からは発見されていないではないか。

それに対して土着説を掲げる人たちはこう反論する。

「人間にとつて有益でも有害でもないから公式発見が遅れただけだ。熱帯系などと言つたつて、ヒマラヤ山脈近くのカシミール地方など結構寒い土地にも生息している。日本にもともといつて不思議はない。雷獣伝承だつてある」

結局のところ、十分な調査がまだ行われていないため結論は出ていない。日本のハクビシンの出自はいまだ謎のままである。

無実の罪？

地方によつては天然記念物の地位まで与えられて、平穩な暮らしを保証されてきたハクビシンたち。しかし、特に天敵がいけないせいか、数を増やしてしまつた彼らの前途は決して明るいとは言えない。関東や中部地方を中心に果実や農作物を盗む犯人として近頃評判を落としているのだ。

そもそも雑食性で何でも食べるハクビシン。日本ではおもに果物や昆虫などを食べているようだが、以前は人間の果物といつても生産過剰で捨てられたもので十分だった。しかし、数が増えてくれば事情は変わる。商品にまで手を出すものが現れ始めたというのだが、実のところ、彼らの「犯罪」が実証された例はあまり多くないらしい。それでも、ハクビシンは、盗つたミカンをまるで人間みたいに皮をむいて食べる、などとまことしやかな噂が流れる。害獣扱いである。でも、これはちよつとかわいそう。彼らの多くは（あるいはすべて）は、自らの意志で日本にやって来たのではない。もちろん新種の病原体の感染の可能性を承知で観光にやって来たわけでもないのだ。

日本で、「雷獣」、「ペット」、「毛皮獣」、「天然記念物」、「害獣」と移り変わつてきたハクビシンの肩書き。そしてこんどは世界的に「病原獣」のレッテルが張られてしまうのか。いや、いつの日か、ウイルスごと果狸（ハクビシンの中国名）を頂いてしまった人物が、人民共和国の過剰人口調節に功ありと名誉回復され、合せて「益獣」の榮譽を得ることもないと言いきれまい。（望月）

(六面から続く)

だから犯人は出来るだけ殺人が露見しないように画策する。その究極が完全犯罪への挑戦となる。そもそも人間を含めた生物の死には必ず原因がある訳だが、その原因のうち他人の意志によって生命を絶たれた場合に殺人事件となる。という事は、死の原因が他人の意志以外のもの、すなわち自殺や病死、事故死であると、犯人と被害者以外の全員が信じれば犯罪ですらない事になるだろう。ではどうやって・・・。

まず自殺を装う場合、自殺するにはそれなりの原因があるだろう。精神的に不安定だったり、金銭的に切迫していたり。物理的にせよ精神的にせよ追いつめられていないと自殺自体が疑わしいものになる。殺したい相手にそう都合よく自殺の原因になりそうな事案がある事はまあなはずだ。しかし、その条件が満たされれば試す価値はあるかもしれない。その場合、手を下

(一面から続く)

窓の位置に高い木々が風で揺られている。雨のせい、緑が一層鮮やかなれど、枝の先の方は力なく下がり気味。しかし、のんびりとその光景を眺めるのも悪くはない。病院の中では、時間の経過はいやに遅く感じられる。つられて木々の揺れさえスローモーションであるかのよう

に、木を見て森を見ず、という言葉が浮かぶ。今、私が目を留めているのは、枝の先の微細な揺れであって、木々全体ではないのか、と。視野の中には、木々どころか、その向こうに町並が見えているにもかかわらず。そう思ったらどこに視線を置くべきか、突然あやふやになってしまい、心を喜ばせていた景色は、居心地の悪い空間に変化してしまっ

た。帰り途、降り止まぬ雨の中、オートバイを走らせながら、まだ、このことが念頭を離れなかった。ヘルメットで視界を制限され、雨粒の

さなくても本当に自殺してくれるかもしれないのだが・・・。そう考えると自殺を装うという

方法はなかなか難しい気がする。どうしてもやりたければ、本人が自殺しそうだ周囲にささやき廻らなければならぬ。しかし、そう言い張るのは自分だけなのだからその事が露見して怪しまれ、完全犯罪どころの騒ぎでは無くなる可能性大だ。では事故を装う場合を考えてみよう。事故とは本来どこかに不注意な部分が含まれるから事故が起こる。事故に見せかける場合はその不注意の部分を作作的に演出しなければならぬ。それを他人に期待しても無駄なので、交通事故死を装ってなんて事は非常に難しい。誰かに頼み車で轢いてもらうなんて、轢いた本人との関係が露見したが最後必ず疑いがかかる。では被害者本人の不注意による事故はどうか。例えば、修理の為に上った屋根から落ちるとか、風呂場で溺れるとか、完全犯罪達成の可能性としてはこの辺りが一番大き

反射で歪められ、自らのスピードによって無理矢理後方に押しやられていく、眼前の景色の連なり。私は何を見ているのだろうか。

黄色い花とモンシロチョウ、緑の草と太った猫、枇杷の木とその実をくわえた鳥、青空とくすんだ赤い屋根。私が嬉々としてビデオ・カメラで撮影した、そういった種々が、テープに収まった瞬間に、単なる映像と音声に変貌してしまふ。それが良いとか悪いとか、そんなことではない。それはそういうふうに機能すべく作られたものなのだから。おかげで、真冬に夏の景色を楽しむことができたり、ここ杉並に居ながらにして海外の光景を眺めることができる。ちょっとした小細工で、現実のように見せかけた非現実に触れることもできるのである。

技術の進歩は万能ではない。当たり前なことである。団地の片隅で小学生が集まりシエーをしている何ものでもないモノクロの写真も、先進の技

いと思われる。

事件性のあるなしの判定にはいくつかがポイントがある。まず、遺体に不審な点の有無。次に遺体の姿勢や場所、その環境だ。例えば、遺体発見場所が完全に密室の場合、確かに事件性は無いものと思われがちだろう。しかし、致死に至るまでに時間のかかる薬物を使用した場合は発見場所が密室でも関係ない事は容易に想像出来る。余談だが、見かけをよほど良くしておかないと、通常は必ず遺体を解剖して調査をする。当初事件性が無いと思われても、行政解剖は十分に有りうるのだ。また、現在の科学捜査力は侮れず、薬物を使用した場合などは露見する確立の方が高い。昨今、風邪薬を多量に飲ませて計画殺人を実行した者が検挙されたばかりだ。また毒入りカレー事件のヒ素成分も丸裸になり、有罪の決め手になったほどだ。

術で撮られた作品と負けず劣らず素晴らしい。いや、比較すること自体意味がないだろう。

私は目に映る全てのものを見ているのでもなく、耳に届く全てのものを聴いているのでもなく、私が見て聞いて触れて感じる全てのこと、私という、極めて自分勝手なフィルタを通してしか私の中に入ってきたり来はしないのである。そして、それは他のどんな方法で再現することもできないし、そのままを誰かに伝えることもできない。その一瞬が過ぎてしまえば、記憶や経験とぶつかりあって、どんどん歪みが激しくなり、時には、時空を超えて繋がったり千切れたり、忘却の彼方に消えてしまったり。それが私にとっての世界なのであり、あなたにはあなたの世界が、ばか猫にはばか猫の世界があるのである。

この共有の不可能さ加減は悲しむべきことなのだろうか。それとも……

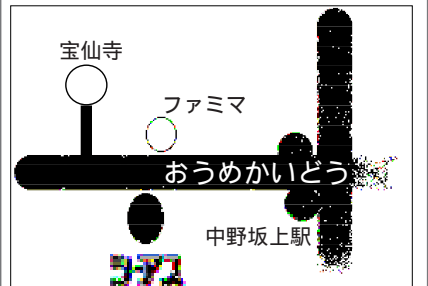
(全木)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta@geta-s.com
篠崎健一アトリエ

1クラス4人までの少人数制学習塾
中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451



編集後記
からす新聞第五巻第五号(通巻第五三三号)無事、発行できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひぜひお寄せ下さい。
次号発行予定日は二〇〇三年六月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。